

2019年度 大学院奨励研究員研究報告書

2020年3月31日

関西学院大学学長 殿

奨励研究員

氏 名	中村 早希 印
-----	---------

指導教員

所属・職名	文学部・教授
氏 名	小川 洋和 印

以下のとおり、報告いたします。

研究課題	複数源泉・複数方向の説得状況における態度変容プロセスの解明
採用期間	2019年 4月 1日 ~ 2020年 3月 31日

研究科委員長・研究科長印	事務局印

提出先： 所属研究科事務

研究発表状況（奨励研究員採用期間内に発表したものおよび、近く発表予定のもの）

（１）学会誌等への発表（著者、発表論文名、学会誌名、巻号、発表年月、掲載頁等）

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

雑誌論文	著者名		論文題目			
	雑誌名			巻号	発行年月	掲載頁

図書	著者名		論文題目			
	書名			発行年月	頁	
					総頁：	
	担当箇所：					

※論文題目：共著の場合の担当部分のタイトル

（２）学会発表（口頭・ポスター：学会名、開催地、発表論文名、発表年月日等）

学会名	日本社会心理学会	開催地	立正大学・品川キャンパス
題目	2者から異なる方向に説得される状況における手がかりと論拠の相対的な優劣が態度変容プロセスに及ぼす影響	発表年月日	2019年11月10日

学会名	日本心理学会	開催地	立命館大学・大阪いばらきキャンパス
題目	社会心理学における行動変容 （「産業・政策決定の領域で必要とされる心理学：行動変容 (behavior change) に関する基礎と応用をつなぐアプローチ」公募シンポジウム 話題提供）	発表年月日	2019年9月13日

学会名		開催地	
題目		発表年月日	

研究経過状況（3000字程度）

●本研究の目的・概要

本研究は、複数源泉・複数方向の説得状況における態度変容プロセスを実験社会心理学的に解明することを目的としたものである。複数源泉・複数方向の説得状況とは、ある題材について、複数の源泉（説得者）がそれぞれ異なる唱導方向に説得を行う状況のことを指す。その典型的な例として、複数の候補者が存在する選挙場面や、複数の企業の製品が存在する商品選択場面が挙げられる。このように複数源泉・複数方向の説得状況は実生活において頻繁にみられるにも関わらず、社会心理学における説得研究ではあまり注目されてこなかった。そこで本研究では複数源泉・複数方向の説得状況における態度変容プロセスを解明するために、その最初の段階としてヒューリスティック・システムティックモデル（HSM; Chen, & Chaiken, 1999）を基盤理論として適用可能であるかどうかを検討した。

HSMは説得による態度変容プロセスを説明する主要なモデルの1つである。このモデルでは、態度変容プロセスをヒューリスティクスを用いた迅速で簡便な処理（ヒューリスティック処理）と、包括的で分析的な処理（システムティック処理）の2つに区別して説明される。

本研究の目的を達成するために、まず複数源泉・複数方向の説得状況に関する研究の現状についてレビューを行った（研究1）。次に、複数源泉・複数方向の説得状況の中でも、唱導方向が対立しないタイプ（AとBのどちらがよいか意見が異なるタイプ）に注目し、HSMの適用可能性を検証するシナリオ実験を2つ行った（研究2）。そして、唱導方向が対立するタイプ（Aについて賛成か反対かが異なるタイプ）についても、HSMの適用可能性を検証するシナリオ実験を2つ行った（研究3）。最後に、これら3つの研究の結果をまとめて考察を行った。

●採用以前の研究経過

<研究1>

過去の説得研究のレビューから、現状における説得研究の問題点を指摘し、複数源泉・複数方向の状況における説得の受容プロセスの解明方法について議論を行った。先行研究のレビューから、これまでにある程度明らかにされてきた説得の順序のみならず、複数の説得者の属性や内容を同時に比較すること（これを「複数の説得の同時考慮」という）もまた、複数源泉・複数方向の説得状況の態度変容に重要な役割を果たす可能性が示唆された。そして、HSMをベースに複数の説得の同時考慮のプロセスを加味した発展的なモデルを検証するための実験手続きを提案した。

研究1の内容は、査読つき学術誌「心理学評論」61巻2号に掲載された。

【文献情報】中村早希・三浦麻子（2018）説得の2過程モデルの複数源泉・複数方向状況への適用 心理学評論, 61(2), 157-168.

<研究2>

複数源泉・複数方向の説得状況においても、その基盤理論としてHSMが適用できるかどうかを検討した。説得研究の多くは、一人からある方向に1回説得を行う状況（単一源泉・単一方向の説得状況）が設定されており、複数源泉・複数方向の説得状況においてもHSMがそのまま適用できるかどうかについては十分に確認がなされていない。そこで研究2では、複数源泉・複数方向の説得状況の最小構成単位である、2者が異なる方向に説得を行う状況を設定し、この状況においてヒューリスティック処理とシステムティック処理の2つの特徴的なプロセスが確認できるかどうかでHSMの適用可能性について検討した。

研究方法として、説得的メッセージを提示する際の受け手の認知資源を制限することによって、ヒューリスティック処理、あるいは、システムティック処理のいずれかがなされやすい状況を設定した。この操作の下で、外集団成員の方が内集団成員よりも論拠が強いメッセージを提示した場合にそのどちらの説得に応じるかを測定した。その結果、認知資源を二重課題の実施やメッセージの提示時間によって制限した場合、そうでない場合と比較して、内集団成員の唱導方向へ、つまり好ましいヒューリスティック手がかりを持つ方向への態度が形成された。この結果は、複数源泉・複数方向の説得状況における説得の受容プロセスの根幹にHSMが適用可能であることを示している。

研究2の成果は、査読つき学術誌「社会心理学研究」34巻3号に掲載された。

【文献情報】中村早希・三浦麻子（2019）.2者から異なる方向に説得される状況での被説得者の認知資源と態度変容プロセスの関連の検討 社会心理学研究, 34(3), 119-132.

●2019年度の研究経過

<研究3>

研究2における「複数方向」というのは、特定の政策に関する論点の差異で操作されており、唱導方向が対立している（政策への賛否が分かれている）わけではなかった。そこで、研究3では唱導方向が対立している状況を設定し、この状況においてもHSMが適用できるかどうかを検討した。

実験では、ある制度について賛成と反対の立場をとる2名の意見文を読ませた。メッセージを読ませる際に、題材に対する動機づけを低めたり、認知資源を制限したりすることによって、ヒューリスティック処理もしくはシステムティック処理のどちらかが優勢になるように操作した。この操作の下で、好ましくない説得の方が好ましい説得者よりも論拠が強いメッセージを提示し、どちらの説得者が主張する方向に態度が変容・形成されるかを測定した。ヒューリスティック処理が優勢な場合とシステムティック処理が優勢な場合との間に、説得後の態度に差が見られなかった。つまり、唱導方向が対立するパターンにおいてはHSMを基盤理論としてそのまま用いることができなかつた。

●最後に

大学院奨励研究員として1年間ご支援いただき感謝申し上げます。ご支援のおかげで、博士論文（「複数方向の説得状況における態度変容プロセスの解明」）を提出し、審査を経て、博士号を取得することができました。なお、本研究の成果については、2020年1月27日（月）に開催された博士論文公開発表会で報告済みである。

以 上